KP

協議会・基幹・拠点

2025/7
第 30 号

呉市協議会･基幹･拠点事務局（芸南支援センターくれんど）
〒737-2517　呉市安浦町水尻 1 丁目 3 番 1 号
TEL：0823-69-1055 / FAX：0823-69-0043
E-mail：kure-kikan@kurend.com

障害のある方の「その人らしい暮らし」を支えるために

～「障害者相談支援事業（身体に関する相談）の現場から～

呉地域障害者生活支援センター
相談支援専門員　山本　秀明

「毎日をいきいきと楽しく過ごしたい」これは誰もが抱く共通の願いです。

呉市社会福祉協議会では、呉市からの委託を受けて『呉地域障害者生活支援センター』を設置し、障害のある方やそのご家族が、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、「障害者相談支援事業（通称：委託相談）」を実施しています。

この事業は、いわゆる「計画相談支援」の対象とならない方々への相談援助を担うもので、障害福祉サービスに直結しないケースや、制度の狭間にある日常的な困りごとにも最大限対応しています。

具体的には、福祉サービスの利用支援、社会資源の活用、社会生活力を高めるための助言、ピアカウンセリング（障害のある方自身による相談支援）、専門機関との連携、権利擁護など、多岐にわたる支援を総合的に行っています。

たとえば、医療機関の相談員からの依頼で福祉用具の情報を提供したり、外出や余暇活動への不安について一緒に考えたり、必要な制度へとつなぐ支援を行っています。また、制度の枠には収まりきらないような、ちょっとした不安や日々の悩みにも耳を傾け、「話を聴いてもらえてよかった」と感じていただけるような、安心して相談できる場でありたいと願っています。

さらに当センターでは、ピアサポート活動として、同じ立場や経験を持つ仲間同士が集う「サロン」や「講座」、「障害者スポーツ体験会」なども開催しています。障害のある方同士が出会い、つながることで、「自分らしい暮らし」のヒントを得たり、新たな一歩を踏み出すきっかけとなったりするような、そんな場所を目指しています。

私たちが日々大切にしているのは、「誰のための支援なのか」という原点を常に忘れずにいることです。そして、「このまちで安心して暮らしていけるように」という想いを持ちながら、常にご本人とともに考える姿勢を大切にしています。人が変わっていくためには、時間や経験、そして何より“誰かとの出会い”が大きな力になります。そうした出会いが地域の中で自然に生まれていくことを願いながら、私たちは日々の支援に取り組んでいます。

また、このような日々の相談支援を呉市全体で支えていく仕組みとして、「自立支援協議会」があります。ここでは、現場で見えてきた課題を関係機関がともに共有し、「どうすればもっとよくなるか」を一緒に考えています。

これからも、一人ひとりの“その人らしい暮らし”を支えるために、私たちは相談支援の輪をつなぎ、そして広げていきたいと考えています。

「大空へはばたこう」上映会＆シンポジウム

7 月 16 日、午前中はパンジーメディア制作の「大空へはばたこう～自立への挑戦～」の上映会と、午後からは「地域で暮らすということ～当事者が主人公～」と題した田中聡子・広島県立大教授の講演、最後にシンポジウムを開催しました。

協議会では、今年度「地域移行」をテーマの一つとして取り組むことを決めていて、そのことを正面から考えるきっかけとなる場となりました。講師のみなさんのそれぞれの発言の要約と、参加者の感想、そして協議会で今後検討していきたい論点について、以下紹介します。　（事務局　小河　努）

大空へはばたこう・映画構成（収録 105 分）

第 1 章　入所施設はなぜつくられたのか
第 2 章　入所施設の中で何が起きていたのか
第 3 章　入所施設、世界では…
第 4 章　入所施設から地域へ
第 5 章　入所施設のない世界へ

講師から

小川道幸・パンジーメディアプロデューサー

私が知的障害のある人と最初に出会ったのは 2015 年でした。それまでの 私の人生で、ほとんど触れたことのない人たち。彼らと何を話しどのように接すればよいのか、近づくことも声をかけることもできませんでした。 それから 10 年。知的障害者と一緒に映像を作ってきた今、最初に感じた戸惑いはすっかり消えました。それまで仕事をしてきたテレビ界の価値観を持ち込んでも、知的障害のある人たちの思いを伝えることは出来ません。彼らのありのままの姿、その存在を受け入れた時、知的障害者の様々な姿の意味が見えるようになってきたのです。

「大空へはばたこう」を作っている時、一番意識したのは知的障害のある人たちの“目線”でした。彼らと同じ地平に立ち、彼らと同じ意識で語ろう。そのために取材は知的障害当事者。カメラや音声、ナレーションや選曲は、すべてパンジーの当事者と職員にお願いしました。

社会の人たちが、自分の価値観で知的障害のある人をみるのではなく、自分の心を解き放ち、色をつけないで向き合ってくれた時、社会には彼らを遮るものがない、まさに「大空」になり、みんなが自由にはばたけるのだと思います。

林淑美・社会福祉法人創思苑理事長（兼パンジー統括）

私が入所施設で働いていた頃、地域の学校への通学は困難で、子どもを学校に通わせたい親は入所施設を頼るしかありませんでした。私は、泣き叫ぶ子どもを抱っこして帰る親を何度も見送りました。しかし、時間が経つにつれて、障害のある子どもたちは自宅の中にさえ帰る場所を失いました。彼らが本当に望んでいたのは質の良い入所施設を作ることではなく、家族と一緒に暮らすことでした。

創思苑ではこれまでに 25 人の人々が入所施設から地域での生活を始めました。その多くは障害の重い人で、地域で暮らすことはできないと思われていた人たちです。行動障害のある人、酸素吸入など医療的ケアが必要な人、親が高齢になった人や亡くなった人で 365 日グループホームで暮らしている人、訪問医療や訪問看護を利用している人、パートナーと暮らしている人、そして看取った人もいます。知的障害者は地域で自分らしく暮らしたいと願っています。

田中聡子・県立広島大学教授
「地域で暮らすということ～当事者が主人公～」

障害のある人が地域で生活するには、さまざまな支援をコーディネートし、本人の意思を尊重した地域生活をいっしょにデザインし、実行していくことが必要ですが、そのサービスはあなたの住む地域、障害者が生活する街にありますか。

超高齢社会、支え手不足、人手不足、福祉サービス以外にもタクシー、路線バスから商業施設、病院等々大変です。「ない」場合、地域生活をあきらめますか。

自己決定、意思決定支援は、人が生きていくときの基軸となる権利。浦河町東町診療所の実践のように、当事者が語り、当事者が思い描くことの実現に向けて、対等な関係のなかで取り組んでいる地域もあります。

障害のある人が地域生活できることは、高齢になって医療や介護が必要となっても、ひとり暮らしで車がなくても、買い物に自力で行けなくても、地域で生活できるということ、子育てがうまくいかなくても、親と子どもが地域で生活できるよう、そういう包摂的な地域、社会をつくることができるかどうかが地域に生きるあなた自身に問われています。

感　想

・障害者支援に携わる者として、改めて、「本人主体」の支援について再考する機会となりました。強度行動障害者の地域生活の実現に向けた取り組みについても、ぜひ学んでいきたいと思いました。
・相談支援とは、本人の思いや願いを実現するための、ワクワクするような企てをプロデュースする役割であるというお話が印象的であり、あらためてじぶんの役割を再確認することができました。学びの深まる内容でした。
・「パンジーだからできたこと」と片付けるのではなく、「なぜできたのか」を丁寧に紐解いていくことが、支援の変化や広がりにつながるのだと学ぶことができました。
・地域移行した当事者を見に行った入所職員が、冷蔵庫を自分で開けた、テレビのチャンネルを変えたという行動に驚いた！と話していてショックを受けた。入所施設では、それほどまでに当たり前のことが出来てなかったこと、許されていなかったのか。人権がないってことなんだと思った。
・実際に映像でみることで、地域に出た本人の表情が豊かになっていくことを感じることができ、こんなに変化するんだと思いました。
・改めて、入所施設から地域移行をいかに進めるかを考える機会となった。
・行政として、必要なサービスの隙間をどうするか考えないといけないと思いました。
・参加者みんなが、それぞれの立場で何ができるかを考え、行動することで、地域の理解と環境が変わっていくのではないかと思った。
・児発では、その後のことを不安に思っている保護者も多いです。今回の映画を見て大人になった時の支援のイメージが少しですがわかってきました。
・支援とは、「その人らしい暮らしを一緒につくる」ことなのではないかと感じました。現実の難しさもしっかり見つめつつ、「難しいからやめよう」ではなく「どうしたらできるか」を考えていくことが大切なんだと感じました。
・入所施設も必要なサービスだと思っていたのですが、歴史があることを知り日本の福祉もあるべき姿にしていかないといけないと強く思いました。
・障害のある人が地域生活できる人が当たり前になるためには、周りが変わるしかないと思いました。
・パンジーだからできるんだ、という考え方もあるかもしれませんが、なぜできているのか？その部分を考えていければいいんだなと思いました。自分自身が仕事を楽しみ、楽しさが周りにも広がっていけばいいなと感じました。

・途中、胸が苦しくなるようなところもありました。支援者としては入所施設がなくなれば良いと思うし、地域移行できるならそれが 1 番だと思いますが、親の立場や家族として考えると、入所という選択肢があるのは一つの救いでもあります。私は周りの影響で障害があっても地域の学校、普通学級という考え方を持っていたため、子どもを普通学級に入れましたが、3 年生の頃から本人が苦しさを身体などで訴えるようになり、好きだった行事も全て欠席するようになったのでそこから支援級に変わりました。支援級も決して居心地が良かったわけじゃないし、それは今も同じで、山田さんの語りを聴きながらそういういろいろな事を考えていました。こういうものを見るのは正直しんどいなぁ、と。
・今年から母の介護が始まって、障害をもった人と母が重なり、今の日々の事を色々と映画を見ながら考えていました。自分にとって重い映画でした。

今後の論点

1.地域移行プロジェクトの立ち上げ

・22 年 9 月の国連障害者権利委員会からの勧告を受け、国も 26 年度末までに入所施設の 22 年度比 5%の削減目標を打ち出しています。
・「行動障害者」、医療的ケア児・者を含めた、地域移行へ向けてのロードマップを作成するためのプロジェクトの立ち上げを、協議会で検討します。
・地域の受け皿・社会資源づくりの論点として、障害者をセーフティネットの対象とするだけではなく、単身化社会、孤立化社会の再生可能性、持続可能な担い手のキーパーソンとして位置付けられるかどうかの論点も盛り込みます。

2.入所施設等の存在意義、支援内容

・現実に入所施設等に今現在も 12 万人を超える障害者が暮らし、待機者が減らない現実があります。全否定論だけでは私たちの現状を打開することはできません。入所施設等で、今のいま何に取り組んでいくのかという支援内容や支援の道すじを明らかにしていく必要があります。
・緊急リセット、緊急入所等のニーズは高いものがあります。移行後を見据えた、拠点機能とリンクさせた議論が必要です。

協議会・基幹・拠点 25 年度 第 1 期をふりかえって

呉市に地域生活支援の 3 基盤がそろい、次のような役割分担と協働を確認してスタートしました。

【役割分担】

4 カ所のエリア**拠点**は、3 基盤の土台として相談対応、緊急対応、地域移行支援、専門的人材の育成、地域づくりを推進し、**基幹**は虐待防止センターの窓口機能、協議会運営、相談機関への後方支援、複合ケース対応、地域体制整備のコーディネートを担い、そして**協議会**は、障害者の関係事業所、関係機関のプラットホームとして、障害関連の諸課題や地域課題の解決のために取り組む。

第 1 期（4 月～7 月）はそれぞれ次のようなことに取り組みました。課題と併せて報告します。

【協議会】

・3 基盤のプラットホームとしての役割から、まずは基幹・拠点併せた年度目標の確認、これまでの課題の可視化、未加入事業所の加入促進をテーマに取り組みました。

・具体的には、3 基盤の紹介や年度計画を載せた「KP 通信 29 号」を 5/30 に発行し、未加入事業所にも送るなどして、加入法人は 4 増の 93 機関・法人となりました。

・課題については、部会・地域課題について、7 月末までにそれぞれの年度取り組み課題を明らかにし、7/16 には、地域移行をテーマに「大空へはばたこう」の映画上映会と、「地域で暮らすということ～当事者が主人公～」をテーマに田中聡子・県立広島大教授による講演、その後シンポジウムを持つことが出来ました。

・シンポジウムを受けて、さっそく地域移行プロジェクトの立ち上げ検討等の課題が出ていますが、そのほか、課題を明確にするための障害福祉課からの児発・放デイ事業所へのアンケート調査の実施や、相談事業所向けのアンケート調査の実施を検討しています。

【基幹相談支援センター】

・今年度立ち上がった基幹相談支援センターについて、

まず総合相談や拠点等地域の相談支援事業所への後方支援、権利擁護・虐待防止、協議会運営等の業務に係る実績のデータベースを整えました。

・総合相談や基幹へのバックアップ依頼は、センターの役割が浸透するにつれて、徐々に増えていくものと思われますが、出だしでは総合相談が月に 10 件程度、地域の相談支援事業所等の後方支援が月に 2 件程度でした。

・また、人材の養成、バックアップについては、相談支援の初任者研のインターバル実習を、委託相談、拠点とともに担い、重度訪問介護従事者養成、強度行動障害従事者養成、同行援護従事者養成、喀痰吸引研修などの養成講座を実施しています。

・基幹として、外部の関係機関から連携を求められるケースも出て来ています。6/30 には、第 1 回呉圏域精神障害者地域生活支援推進協議会が開かれました。ここでも、顔の見える関係づくりと地域課題の抽出の重要性が確認されています。

【拠点（まるごとネット呉）】

・月に 1 回の 4 拠点の連絡協議会と、身体・精神の委託相談と重層的支援推進室を加えた月 1 回の事例検討会を軸に、拠点の運営を行いました。

・1 期は、4 拠点の体制整備と拠点 5 機能の評価に係る行政による「評価シート」を実施し、その課題を確認しました。

・8/7 には、中島学・福山大学教授を招いての講演とスーパービジョンを実施する予定です。

○協議会ではそのほか、当事者参画と人材育成を今後の課題として取り組んでいきたいと考えています。

（事務局　小河　努）